JAFスポーツWEB

2018年JAF全日本ラリー選手権第9戦　日本アルペンラリー®ヒストリックシリーズ第4戦
M.C.S.C.ラリーハイランドマスターズ2018 supported by Sammy［JAF公認No.2018-1122］

開催日：10月12～14日　開催場所：岐阜　格式：国内　主催：MCSC［クラブ登録No.加盟20002］

フォト／中島正義、水野文幸、山口貴利、JAFスポーツ編集部　レポート／JAFスポーツ編集部

新井／田中組WRX、3年ぶりに全日本王座を奪取

タイトルレースのライバル不在の中、舗装でも速さを見せてタイトルを決めた新井敏弘／田中直哉組WRX。

2018年全日本ラリー選手権ラス前の一戦は伝統のハイランドマスターズだ。今回で46回目を数えたこのラリーは全日本ラリーの中でも長い歴史を持つラリーとして知られている。ラリージャパンが始まる遥か前から、国内ラリーとしては破格の長距離を走るグラベルラリーとして、別名“カーブレイクラリー”の異名を取ったが、使用していた林道が舗装化されるに伴い、ラリーもターマックラリーの性格を強め、現在はオールターマックラリーとして開催されている。それでもかつてはダートだった「青屋」、「駄吉」といったステージは舗装化された現在も健在で、このラリーの勝負どころとなっている。

近年のハイランドマスターズは岐阜県高山市をホストタウンとして、高山市の東及び南に広がるエリアを舞台としている。LEG1は高山市東部に位置するお馴染み、青屋上り（8.90km）～駄吉下り（6.37km）の2ステージをこなしたのち、スタート＆フィニッシュそしてサービスが置かれるモンデウス位山スキー場の南に位置する無数河（むずごう）-アルコピアステージ（6.16km）をこなして最初のサービスイン。午後も同じ順番でループして3SSをこなしてこの日は終了。翌日のLEG2は無数河の南に位置する牛牧ステージ（5.33km）からこのラリーでは比較的新しい「あたがす」ステージ（9.70km）を経て、前日とは逆走となるアルコピア-無数河（6.18km）を経てサービスイン。このループをもう一度こなしてフィニッシュという構成だ。

SS総距離は12本87.28km。リエゾンを含むトータル距離は341.75kmというルートで競われた。なおアルコピアはモンデウス同様、スキー場で、その一角がLEG1ではゴールとして、LEG2ではスタートとして使われる。そ

JN6／1. 奴田原文雄／佐藤忠宜組は4本のベストで追撃したが叶わず、2位にとどまった。2. LEG2は3位をマークしてDAYポイントも獲得した生田輝明／馬瀬耕平組が3位に食い込んだ。3. コ・ドライバーの田中直哉選手とともに3年ぶりの全日本チャンピオンに輝いた新井敏弘選手。

JN5 ／ ***4.*** LEG1から順位を上げ2位入賞の眞貝知志／安藤裕一組。***5.*** 小濱勇希／馬場雄一組は3位に入り、シリーズチャンピオンを確定した。***6.7.*** 「ラリー中も特にリア回りのセットアップを重点的にやって、理想的な動きに持ってこれました。色んな勉強ができたラリーでした」。川名賢／保井隆宏組は2年連続でハイランドマスターズを制した。

JN4 ／ ***8.9.*** 今季2勝目をあげた山口清司／山本磨美組86。「スイフトは思ったより速いですね。舗装でこんなに来るとは思わなかった。86をちゃんと走らせられれば突き放せるはずだけど、なかなかそこまで持って行けてない」と新たなライバルを評価した。***10.*** SS2でコースオフ、クルマを傷めたにも関わらず最後は1.7秒差まで追い詰めた山本悠太／北川紗衣組。***11.*** スイフト勢最上位に食い込んだ関根正人／草加浩平組は3位。

JN3 ／ ***12.13.*** 今回もフルポイントをマークする磐石のラリー運びを見せた天野智之／井上裕紀子組。勝ちを逃した前戦ラリー北海道のリベンジ達成。***14.*** コンスタントにタイムを稼いで3位入賞の岡田孝一／多比羅二三男組デミオ。***15.*** LEG1前半はベストも奪って天野組を追い詰めた大倉聡／豊田耕司組は2位でゴール。

して簡易舗装で非常にグリップの低いこのセクションが、このラリーでは唯一のギャラリーステージとして設定された。2クラスに分かれたオープンクラス12台、日本アルペンラリーヒストリックシリーズ最終戦に臨んだ2台を加えた計57台のエントラントが挑んだ。

前戦ラリー北海道で新井敏弘選手のグラベル完全制覇を阻んだ勝田範彦選手が逆転タイトルの可能性を繋いだJN6クラス。残り2戦は勝田選手が得意とする舗装が続くとあって、今回の一戦が天王山になると思われたが、勝田選手はラリー前に怪我をしてしまったことが響いて今回は不出場となってしまい、結果、新井選手は上位でゴールすればタイトルが転がり込むという状況でラリーを迎えることになった。ラリーの主導権を握ったのは2017年にこのラリーを制した鎌田卓麻／市野諮組WRX。青屋で叩き出した2本のぶっちぎりのベストが効いて新井／田中直哉組に6.3秒の差をつけて折り返す。

鎌田組は前夜に雨が降り、リスキーなコンディションとなった翌日のLEG2でも最初のSSの牛牧で新井組を4.3秒差で下して首位固めに入ったと思われたが何と続くSS8でマシントラブルでストップ。戦線離脱を余儀なくされてしまう。図らずも首位に浮上した新井組を今度は奴田原文雄／佐藤忠宜組が猛追するが、新井組は「あたがす」の2本で奴田原組を振り切り、

JN2 ／ 16.17.「LEG2も攻めたけど、雨が降って道がルーズだったこともあって、タイムが出なかった。去年はどっちかというと簡単に勝てた感じだったけど、今回は難しいラリーでした」。総合8番手に食い込むタイムをマークした明治慎太郎／北田稔組86がシーズン2勝目をマーク。**18.** 最終SSでベストを奪った戸塚和幸／鈴木隆宏組が2位に入った。**19.** SS9のミスが悔やまれる鈴木尚／島津雅彦組は3位にとどまった。

JN1 ／ 20.3位に入った古川寛／廣田幸子組がともに初の全日本タイトルを確定した。**21.** LEG2後半のプッシュが実って2位確保に成功の伊藤隆晃／大高徹也組。ベスト3本を奪取。**22.23.** 優勝は内藤学武／小藤桂一組スイフト。「今年はグラベルも走り込んだことで逆に舗装のセットアップが好みも変わってきて、ワンランク上がった走りができるようになりました。舗装で勝つことが自分にとっては重要だったので、この勝利で凄く自信がつきました」と振り返った。

優勝で3年振りのタイトルに華を添えた。

「道もリスキーだったし、足回りが新しいタイヤに対して決まってるかも掴み切れなかったので、難しいラリーだったね。あまりプッシュはしなかったけど、今日も実は牛牧で一瞬、側溝落ちたし、変な失敗がなかったことが大きいかな。卓麻が消えたから勝てた感じが強いよね。まだNEWタイヤへのクルマの合わせ込みもできてないので、新城までには詰めたいね」と新井選手は冷静にラリーを振り返っていた。

一方、86/BRZを軸とした戦いが続くJN4、JN2の2クラスはタイトルレースの行方が混沌としてきた。JN4クラスは、直近のグラベル2戦をスキップして舗装のセットを詰めてきた山口清司／山本磨美組86が第2戦唐津に続くシーズン2勝目をあげた。「ドライの昨日はクルマの動きもまあまあだったのでセットを変えずに行ったら、今日は場所によって濡れていたり、乾いていたりとコンディションが一定でなくてリアがどんどん逃げ出すので、スピードを乗せられず苦労しました。昨日のマージンで逃げ切れた感じですね」と山口選手はホッとした表情。LEG2で怒涛の追い上げを見せ、最後は1.7秒差まで迫った山本悠太／北川紗衣組は「牛牧は危なかったですけど、今日はあまり好きではない道にも関わらず意外とタイムが出せましたね。チーム(K-ONE)が元々、舗装を得意としているので短時間でセットアップしてくれたのが今日はタイムに繋がりました」とタイトルレースに踏みとどまる貴重な2位をもぎ取った。

24. OP-2クラス優勝の中野正樹／鈴木裕組パルサー GTI-R。**25.**OP-1クラスは上坂英正／鈴木和人組が優勝。**26.**ヒストリックは新垣裕／新垣久美子組が優勝。

JN4で敗れたK-ONEチームの無念は明治慎太郎／北田稔組86がJN2クラスで晴らした。このクラスはLEG1から明治組と鈴木尚／島津雅彦組BRZがマッチレースを展開し、LEG1は明治組が6.1秒差のトップで折り返すが、鈴木組がLEG2最初のSS7で驚速のベストをマークして首位に立つ。しかし鈴木組はSS9でコースオフ、1分超を失い明治組に首位を明け渡した。「予想通り、今日は尚君の得意な道なんでやられましたけど、何とかマージン切り崩して勝てました。チームが足回りをアップデートしてくれて、乗りやすい方向に振ってもらったことが昨日のDAYベストに繋がりました。ただ尚君がもの凄く速くなってるので新城までにさらに煮詰めないといけないですね」と明治選手。逆転タイトルに繋がる貴重な1勝に気を引き締め直していた。